



2019 年 (令和元年)
12月号 (No. 895)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

令和最初の年次晩餐会は 天皇陛下もご臨席くださり、 多くの出席者を得て盛大に開催

年次晩餐会が12月7日、京王プラザホテルにて開催された。全国からの出席者は509名を数え、光栄なことに天皇陛下も一会員としてご臨席された。記念講演会は日本・エクアドル友好合同登山隊の報告や秩父宮記念山岳賞を受賞した安間繁樹会員の講演、極地探検家の舟津圭三氏と荻田泰永氏の対談など多彩な内容だった。

■会長挨拶

「4つのテーマを活動の柱に」

会場には日本全国の名山の名が付けられた51のテーブルが並び、会員およびその同伴者が着席したのち、古野 淳会長の先導で天皇陛下がご入場されると万雷の拍手でお迎えをした。陛下がご臨席されるということ、会場には新聞・テレビ・雑誌などマスコミ14社が

取材に入っていた。

会の冒頭、今年度より新しく会長となった古野会長より次のような挨拶があった。

「新しい時代に向かって、『遭難防止』『山岳文化の振興』『支部活動の活性化』『自然保護』という4つのテーマを柱に会の活動を展開していきたい。それには全国33支部の皆さんの協力が不可欠であり、



開会に当たって挨拶する古野淳会長

お力添えをお願いしたい」

「自然保護については、今回の晩餐会のために自然保護委員会が日本山岳会の自然保護活動の歴史をまとめてくれた。自然保護は本会の活動基盤の一つであり、我々は会の先輩方の意志を引き継いでい

目次

令和最初の年次晩餐会は 天皇陛下もご臨席くださり、 多くの出席者を得て盛大に開催 … 1	よみがえった1968年ウシュバ峰の夏 … 5
準会員から正会員への移行手続きを簡略化 … 7	晩秋の山里で開催された第35回宮崎ウェスト祭 … 8
講演会「登山を健康増進に生かす」を開催 … 9	山梨県で指定山城の冬山登山届を義務化 … 10
「日本国」登山と藤島玄蔵書を訪ねて … 11	東西南北 … 12
活動報告 … 13	山行委員会／アルパインフォトクラブ
新入会員 … 15	図書受入報告 … 15
支部だより 北九州支部 … 16	図書紹介 … 17
会務報告 … 18	ルーム日誌 … 19
会員異動 … 19	編集後記 … 19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 … 10～20時
水・金 … 13～20時
第2、第4土曜日 … 閉室
第1、第3、第5土曜日 … 10～18時

かなければならない」

「来年の東京オリンピックでは、スポーツ・クライミングが初めて正式競技として実施される。登山文化やスタイルは近年多様化している。日本山岳会でも学生部の活動などにスポーツ・クライミングを採り入れて、成果を出している。一方で海外の山を目指す日本の若者が減っているとも言われている。これからの時代、特に若者たちにとっては国内外の山や自然、異文化と直に触れ合って、感性を育てていくことは大切なこと。そうした次世代育成の面でもぜひご協力をお願いしたい」

■物故会員は58名

続いて物故会員への黙祷を行った。昨年11月末から今年11月末



古野会長から秩父宮記念山岳賞を授与された安間繁樹会員(右)

までに亡くなった会員は58名。吉村健児さんは九州を代表する登山家で、福岡支部長や北九州支部長を歴任し、100周年記念式典では特別功労表彰を受賞した。宮森常雄さんは、登山地図がなかったカラコルム、ヒンズー・クシユ地域の調査・情報収集を長年にわたって行ない、「カラコルム・ヒンズー・クシユ登山地図」を刊行。第5回秩父宮記念山岳賞を受賞した。村井龍一さんは法政大学山岳部の監督として活躍し、日本山岳会では学生部担当理事、常務理事、評議員などを歴任し、2001年からは副会長を務めた。中世古直子さんは1974年に日本マナスル女性登山隊に参加して、女性として世界で初めて8000m峰の登頂者となった。内外の数々の山にも登り、東海支部の方々に慕われた。11月30日には、山岳写真家として活躍した白旗史朗さんが亡く

なった。

■新永年会員は47名

令和元年度の新永年会員は47名。そのうち岡野谷誠、渡辺博厚、節田重節、津田保太郎、堀田哲男、太田義一、大谷洋生、今村千秋、河西邦彦、大平展義、笠原正明、鹿田勝、村田恭邦、平野彰会員ら14名が晩餐会に出席し、壇上で会長から永年会員バッジを授与された。代表して挨拶に立ったのは節田重節会員。「山岳会に在籍した50年間のうち、40年は山と溪谷社に務めていた。編集者という仕事柄、その間はなかなか山岳会のお手伝いをすることはできなかったが、退職後に同級生でもある元会長の尾上昇君に声を掛けられ、会報『山』の編集など山岳会の業務に携わるようになった。今後もぜひ皆さんのご寄稿をお願いしたい」との挨拶があった。

■秩父宮記念山岳賞は安間繁樹会員が受賞

令和元年度の秩父宮記念山岳賞は、西表島やボルネオ島での野生動物の研究に長年携わってきた安間繁樹会員。業績は「熱帯雨林に

おける生物調査と探究」で、壇上で会長から表彰の楯と副賞が授与された。

安間会員は、「私は長年、調査のため熱帯雨林の中で動物のような生活を送ってきた。山登りとはほど遠いなど思っていたが、古野会長の話にあった『山の文化』という分野に、私が携わってきた自然や動物との関わりも含まれるのかなと感じ、力をもらった。これからも西表島とボルネオ島の自然と、そこに住む人たちの姿を見つめて記録していきたいと思っています」と語った。

■梶正彦会員へ感謝状を贈呈

続いて、昨年から本年にかけて合計500万円もの寄付をしていただいた梶正彦会員へ感謝状と記念品を贈呈した。梶会員は1969年に入会し、全国山の日協議会の評議員などを歴任。寄付の目的は日本山岳会創立120周年記念事業となっており、山岳会の寄付規定に基づいて贈呈をした。また、内閣府に対して、梶会員への紺綬褒章授与の申請をしていることも司会者より報告された。

■新入会員は正会員が127名 準会員が74名

今年度は正会員127名、準会員74名、合計201名を新入会員として迎えた。晩餐会にはそのうちの26名が出席。代表して挨拶に立ったのは、中学1年生の中谷健太郎会員。YOUTH CLUB青年部の部長である中谷康司会員のご子息で、これまでに夏の剣岳合宿やGWの雪上訓練にも参加。明神岳・南西稜や北穂高岳・東稜などのバリエーション・ルートも登っているとのこと。「入会前から、日本山岳会の人たちと一緒に山に登っていたので、入会は自然な流れだった。せっかく山岳会に入ったのだから、頑張ってたくなの山に登っていききたい」と抱負を語った。

■乾杯の発声は八木原園明会員「若い仲間たちにぜひエールを」

恒例の鏡開きは、古野会長、小林政志前会長、谷垣禎一(会員)(全国山の日協議会会長、日本山岳ガイド協会会長)、八木原園明会員(日本山岳・スポーツクライミング協会会長)と、さらに陛下にも加わっていただき、5名で行なった。お

酒は今年も、15代会長・故今西壽雄名誉会員ゆかりの「四海王」をご提供いただいた。

乾杯の挨拶は八木原会員。「来年はいよいよ東京オリンピック。スポーツ・クライミングで若い仲間たちが頑張っている。彼らに万全の支援をして、メダルを目指していきたい。応援をぜひお願いしたい」と語り、乾杯の音頭を取った。

その後はテーブルごとに会員同士の交歓を行ない、料理とお酒を堪能した。陛下も同じテーブルを囲んだ会員や記念講演会の講演者との歓談を存分に楽しまれたご様子であった。陛下ご退席後には、恒例の33支部の紹介があり、盛況のうちに閉会となった。

■特別展示と記念講演会

晩餐会に先立って特別展示、記念講演会、山岳写真展、図書交換会などが実施された。

特別展示は、自然保護委員会主催で「日本山岳会の自然保護活動の歴史と今」と題して、会の自然保護活動の歴史を年表などで振り返るとともに、現在、各支部・各地域で展開している様々な活動を紹介。また、今年は台風および豪雨

によって全国の山々で登山道などの被害が発生したことを受けて、「令和元年の台風及び豪雨による山岳被害状況 全国支部の被害調査」が展示・報告されていた。

【記念講演会】

日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念友好合同登山隊報告「赤道直下の氷河の山での交流」渡邊雄二会員、登山隊メンバー

日本とエクアドルは1918年に外交関係を樹立して、2018年に100周年を迎えた。その記念事業として、日本山岳会とエクアドル山岳連盟が友好合同登山を実施した。山岳会としては、創立120周年の国際交流事業でもあった。日本側のメンバーは14名。

9月1日に日本を出発し、エクアドルの首都キトに到着。翌日には日本国大使主催による歓迎レセプションが大使公邸で行なわれた。3日より登山活動を開始し、世界で最も標高の高い活火山コトパクシ(5897m)や、エクアドル最高峰チンボラソ(6310m)に登頂。14日に帰国した。

「来年はエクアドル側の訪問団を迎えることになるため、日本山岳

会として万全の準備をしていきたい」と来年に向けての意気込みが語られた。

秩父宮記念山岳賞受賞記念講演「西表島からボルネオ島へ」安間繁樹会員

安間会員は、大学時代の1965年に「西表島で未知のヤマネコ発見」というニュースに衝撃を受けて、初めて西表島を探訪。豊かな自然と生き物に触れて、「青春をこの島の研究に懸けてみよう」と決意した。当時、イリオモテヤマネコは研究対象として最も難しい動物と考えられていたが、「西表島は哺乳類が少なく、ノネコとの区別さえできれば、むしろ調査はしやすいはず」と考え、直接観察にこだわって研究を進めた。その過程で世界初の動画撮影にも成功し、論文「イリオモテヤマネコの食性ならびに採食行動」で東京大学から博士号の学位を得た。

1985年にはボルネオ島を訪れ、同年に発足した日本政府による研究プログラムに参加。以来、足掛け25年、正味16年、JICA専門家としてボルネオ島で暮らして、野生動物の研究と若手研究者の育成に携わった。

21世紀に入ってから日本では生活する期間が増えて、西表島の山歩きを再開。すべての峰と沢を踏破することを目指している。「西表島とボルネオ島の自然と人々の営みがあるがままに記録する」というライフワークを、今後も引き続き行なっていくそうだ。

「ラカボシ南壁初登攀」報告 中島健郎会員

2017年、シスパーレ北東壁初登攀でピオレドールを受賞した中島健郎会員、平出和也会員ペアによって今年、パキスタンのラカボシ(7788m)南壁が初登攀された。

報告によれば、当初の目的はラ



新入会員代表として挨拶する中谷健太郎会員



自然保護の歴史や台風被害の特別展示は好評だった

カポシではなく、ヒンズー・クシユ最高峰のティリッチミール（7708m）だったとのこと。しかし、現地で登山許可を待ったが残念ながら許可が下りず、代替案として考えていたラカポシの南面へと転進した。南面の偵察は、許可待ちの間に行なっており、標高3660mの草原地帯をBCとする（6月16日）。ラカポシの南面は上部に多くのセラックを抱えているため登攀ルートが限られ、最終的には南壁を右から回り込むようにして、南東稜を経由して頂上へと至るルートに狙いを定めた。

BC到着の翌日、順化と偵察のために2泊3日で上部へと向かい

6100mまでタッチ。BCに戻ってからは雨やミゾレで6日間停滞し、27日より登頂ステージに入る。27日、5200mのC1入り。C1から上部は雪壁からセラックの横を越えて、雪稜、雪壁と続いた。6日間の悪天候でルート上には雪が降り積もっており、ひたすらラッセル。先頭が空身になつてラッセルしなければならぬ箇所もあったほどだ。それでもなんとか1000m登って、6200mのC2入り。3日目はよくやく南東稜へ上がるが、そこでもラッセルが続き、6800m地点をC3として幕営。天候が崩れたため、30日、7月1日とC3で停滞して、2日、山頂へのアタックをかける。

C3から頂上稜線までは特に難しい箇所はなく、ただひたすらラッセル。稜線上は西風の影響でよくやく雪が締まってきた。行動開始からおよそ8時間で山頂に到達。この日は登山期間中で一番の好天に恵まれて、360度の絶景が広がっていた。

「今回の南面新ルートは技術的に難しい所はそれほどなかった」と中島会員。それでもBCから山頂までの標高差は4000mを超え、

さらに悪天候で雪の処理やラッセル、ルート・ファインディングに苦労させられたこともあり、充実感のある登山を行なうことができたそう。

特別対談「いま、極地に注目！」

「地球環境を考えるために」

舟津圭三さん、荻田泰永さん

舟津圭三さんは、1990年に南極大陸横断国際隊の一員として、220日間をかけて犬ぞりとスキーによる南極大陸6000kmの横断に世界で初めて成功。アラスカ移住後にはアイディタロッド（1800km）などの長距離犬ぞりレースに出場する一方で、極地ガイドとしても活躍し、北極点に9回、南極点に7回も到達している。

荻田泰永さんは、2000年に冒険家・大場満郎さん主宰の「北極極を目指す冒険ウォーク」に参加したことをきっかけに極地に魅せられて、以来、ほぼ毎年のようにカナダ北極圏を中心に単独徒歩行や犬ぞりによる冒険を重ねてきた。2012年と14年には、北極点到達へ向けて無補給単独徒歩の挑戦を行なっている。

対談冒頭、今年11月に舟津さんをはじめとする90年の国際隊メン

バー6人が集まって発信した、「東京宣言2019」について述べられた。宣言の中では、30年前に横断したルートの最初の200miの大部分の氷が現在、崩落して海と化していることが語られ、これ以上の環境悪化を防ぐためにも危機感を共有し、できることからすぐに実行に移すべきだ、と訴えた。

毎年のように北極圏に通い続ける荻田さんも、北極での冒険の困難さを語る中で、数十年前に比べて海水が薄く、不安定になつていくこと、北極点到達が地球環境の変化の影響で年々難しくなっていることなどを述べた。

荻田さんは今春、20代の若者たち12名を連れて「北極圏を目指す冒険ウォーク」という北極圏600kmの徒歩行を行なった。舟津さん、荻田さんに共通する想いは、環境悪化への強い危機感と、チャレンジ精神や冒険する文化を次の世代へと引き継いでいきたいという熱い気持ちであった。

（文・谷山宏典、写真・奥田有恒）

◆注意 年次晩餐会で撮影された天皇陛下のお写真は、SNS等で拡散することのないよう、厳重にご注意ください。（総務委員会）

READING

よみがえった1968年ウシュバ峰の夏 — 氷河から出てきた51年前の装備品

北海道支部 京極紘一

今夏、キルギスの山旅を楽しんで帰国したら、ロシアからびっくりするようなメールが日本山岳会に入っていた。「ウシュバ氷河で30〜40年前のものと思われる装備を見付けた。SAPPHOROの文字があるが、心当たりはないか」というのである。カフカズ山脈のウシュバでの記録を持つ、北海道支部の私に古野淳会長から話が回ってきた。

僭越ながら、私が早速ロシアに写真を送ってくれるようメールを入れた。折り返し送られてきた写真にはツェルトの端にサインが写っていて、私たちがウシュバ西壁を登攀中に失ったものであることは一目瞭然であった。

写真には、懐かしい装備品の数々が、あたかもタイムカプセルを開いたかのように鮮やかに写っていて、まるで51年前の青春時代の薫りが漂ってくるかのような、刺激的なものだった。

ウシュバ南峰西壁を目指して

今から51年前の1968（昭和43）年7月に、私たち4人（小林年車義久、木村紀夫、京極紘一）は、ウシュバ南峰西壁を目指してカフカズ山脈のウシュバ氷河を歩いてきた。日本労働者スポーツ協会から派遣された北海道山岳連盟と第2次ロッククライミングクラブ（RCCC）の合同登山隊であるが、協会への申請が競合したので合同隊となった。計画では、カフカズ山脈で最も困難なウシュバ南峰（4710m）西壁を登攀するものであった。

カフカズ山脈は、黒海とカスピ海の間横たわる一大分水嶺である。その長さは1200km、幅は100〜200kmにわたる長大な山脈で、西部・中央部・東部の3つに区分される。カフカズの真価は中央カフカズにあって、最高峰エルブルース（5633m）からカズベク（5044m）に至る200

kmの間には、5000mを抜く高峰を連ね、スケールの大きい岩壁はアルパイン・クライミングの魅力に富み、最高グレード（6級）のルートが多い所であった。なかでもウシュバ南峰は中央カフカズの白眉である。

氷河から見上げる岩壁は2000mの高さでそり立ち、ヨーロッパ・アルプスの三大北壁（グランド・ジョラス北壁、アイガー北壁、マッターホルン北壁）の1500mをしのぎ、グレードも最高の6級という超困難な岩壁が目の前にそびえていた。

ウシュバ氷河の標高2700mから西壁テールリッジに取り付いたのは7月14日、その翌日には天空にそびえるような柱状岩壁の凹角ルートを登攀していた。取り付いてから3日目のこと、花崗岩の快適なクライミングを味わいつつ3ピッチ目を攀り終え、ザックを吊り上げていたときである。あるうことか、ザックの背負い紐が切れて落下してしまったのである。ザックは2〜3回大きくバウンドして、下の氷河に吸い込まれるように消えていった。ツェルトやトランシーバー、ハーケン、羽毛服、



アイゼン、ピッケル、食料などが入っていて、手痛い損失だった。

でも、それにめぐることなく困難な柱状岩壁を登り切ってしまった。さらに頂上に迫ったが、頂上付近の4500mでハーケン不足と日数不足で下山となった。下降中、南面の大雪田でアイゼンのない1人が滑落して膝の皿を砕くアクシデントがあったものの、ソ連岳人の協力を得て東面のグリユー氷河に無事降り立った。

ツエルトに「NEN」のサイン

そんな昔の登攀を思い出しながらメールに添付された17枚の写真を見つめると、ドキッとするとす。一枚が出てきたときは興奮してしまつた。黄色地のツエルトの端に札幌の登山用具専門店「秀岳荘」のロゴマークと「NEN」のサインがあつた。これは一緒に登つたパ



ロシア・パーティのウシュバ氷河のテントサイト。この後方500～600mの所で発見された

ートナーの小林年さんのサインであつた。そのほかにザックの断片、欠損したアイゼンの一部、メガネケースや雪印のコンデンス・ミルク缶、ジャンケット、破損した高度計など、心当たりのある懐かしいものばかりであつた。

写っている装備は意外と色褪せることなく、氷河の中に埋も

れていたためなのか、まるで冷凍保存していたかのように色鮮やかであつた。

西壁の標高4000mで失つたザックは支流氷河のクレバスに吸い込まれ、凍結されたまま51年かけて流れ下り、ウシュバ氷河の本流に合流した所で姿を現わしたものと推察される。

サインのある写真は決定的な決

め手となり、私たちが51年前に登攀したときに失つたものと判明したことから、装備を発見して知らせてくれたロシア岳人の心温まる行為に、感謝の気持ちを込めてお礼のメールをすぐに送つた。

折り返しロシア側から、遭難者のものでなかったことに安堵し、私たちの失つた装備であつたことを喜び、「古い出来事を聞くのは興奮するものです」ともあつた。

ザックなどの装備品を発見し知らせてくれたのは、モスクワ在住の岳人アレクサンダー・テルポフ氏で、今夏、3人でウシュバ南峰を目指したが残念なことに登れず、その帰途に見付けたとのこと。装備品はそのままにして持ち帰らずに、置いてきたとのことであつた。

ザックの持ち主であつた小林年さんは北海道支部の副支部長を務められたこともあるが、残念なことに2006年8月に他界されている。このことはご家族にも知らせたが、亡くなられてから13年目の出来事に驚きつつも懐かしみ、喜んでいたのが印象的であつた。車さんも他界しているが、もう1人のパートナーの木村さんは存命で、装備の写真を送るとすぐに



見付けた装備品。ツエルト、ジャケット、ザック、トランシーバーなど

電話がきた。話が弾んだのは言うまでもないが、彼が使つたザックやアイゼンは今も大事に保管しているといい、驚いてしまう。驚色の帆布ザックは東京の谷川ザック製作所に特注したもので、4人とも同じものを使っていたから特に思い出深く、それと同じ物が氷河から出てきたのだから、なおさら感慨無量である。

今も続くロシア岳人との交流

その後、一連の経過を古野会長と藤本北海道支部長に報告して終わつたかに思えたが、アレクサンダー氏とは、クライマーとしてのウシュバの登攀に関する興味ある



ツェルトの端にあった秀岳荘のロゴマークと「NEN」のサイン

メールのやり取りが今も続いている。ウシユバ南峰西壁ルートは、今も最高に困難なグレードは変わらないものの、たくさんルートの開拓されていて名称も変わっていた。たとえば「西柱状岩壁」は現在は初登攀者の名前から「ミシエル」の柱状」といい、「凹角ルート」は「南西壁左サイド」と呼ばれ、「キャメル・リッジ」という名称は現在、使われていないとのことであった。

カフカズの難峰ウシユバの天空にそそり立つ柱のような岩壁は、私たちが登って以来、日本人は誰も訪れていないのが気になるし、非常に寂しい思いがする。ウシユ

バ南峰西壁は現在も人気のある壁だそう、日本のクライマーもそこを訪れて、ビッグ・クライミングを堪能することを期待したい。ウシユバは当時、ソビエト連邦のグルジアにあったが、現在は独立してジョージア国の領域になっている。国技の大相撲でジョージア出身の力士「栃ノ心」が活躍している、日本人には馴染みのある国名であろう。

ウシユバの山はこれから冬を迎え、装備品は深い雪に覆われてしまうだろう。来夏にまた姿を現わすという期待は薄く、そのまま氷河に飲み込まれて次世紀へと旅立つのであろうか。51年という半世紀も前へ、タイムトンネルを抜けたような若き日々の世界に一瞬ではあるが引き戻してくれ、青春のロマンあふれるワクワク感と高揚した気持ちに浸ることができた、残暑の9月であった。

なお、このことは9月26日、地元北海道新聞夕刊に「51年前のザック氷河で発見」の見出しで報道された。また、51年前のウシユバ登攀の様子は拙著『素晴らしき幸運な登攀』（2004年、北海道新聞社出版局発行）に掲載している。

NOTICE

準会員から正会員への移行手続きを簡略化

準会員の初年度入会者が今年度末で3年を迎えます。規程により準会員は3年で退会となりますが、手続きを経て入会金や会費を振り込むことにより、準会員は改めて正会員になることができます。

ただし、この準会員から正会員への移行行程は、入会申込書の再提出、2名の紹介者への依頼、加えて限られたタイミングでの入金および会費の支払いが必要となるため、移行するにはハードルが高いことが問題となっていました。

そこで、準会員制度検証プロジェクト・チームでは、次のように制度を変更し、簡略化しました。

(1) 改めて2名の紹介者を付けることとはせず、1名は準会員になったときの紹介者、もう1名は会長もしくは総務担当常務理事が紹介者となる。これは3年間在籍して活動したことを尊重し、無条件で紹介者となるものである。

(2) 入会申込書の提出は不要。先に提出してある準会員の入会申込書を正会員用に転用する。なお、入

会申込書の記載事項に変更がある場合、別途、事務局に変更届を出す。

(3) 1月以降に入会金1万5000円、年会費1万20000円の振込用紙を送付する。

(4) 翌年度4月に正会員としての会員番号および会員カードを発行する。

ただし、前記は2019年度までの年会費を支払っている準会員が対象です。未払いの方は、先に年会費をお支払いください。

なお今回、対象になるのは34名ですが、すでにそのうち6名は正会員に移行しており、また5名が退会しています。

また、3年の期限を待たずに正会員に移行する準会員は、期の途中ではなく年度末に移行することとし、前記の簡略化はなく、2月までに入会申込書（紹介者2名が必要）の再提出、および「承認内定通知」受領後2週間以内に入会金および会費を支払う必要があります。年度末まではすでに準会員としての会費が納入されているので、翌年度4月から正会員となります。詳細は事務局にお尋ねください。

（準会員制度検証プロジェクト・チーム 佐野忠則）

REPORT

晩秋の山里で開催された第35回宮崎ウェストン祭

宮崎支部 谷口敏子

高千穂町と宮崎支部主催による「宮崎ウェストン祭」は毎年11月3日、刈り干しを終え周囲の木々が色づく晩秋の高千穂町五ヶ所高原・三秀台において開催される。

この地に「ウェストン碑」があるのは、ウェストン師が日本アルプスに初登頂する前年の明治23（1890）年11月6日、祖母山に登山していることが、五ヶ所の『矢津田家日記』にて確認されたことによる。

高千穂町や日本山岳会、その他幾多の有志の尽力によってこの三秀台に、ウェストン師の生家から贈られたヨーク石を使った、洋鐘付きの高さ7mのウェストン碑が建立された。おそらくこの場所がウェストン師は祖母山を仰ぎ、久住山や阿蘇山など、連なる名峰たちを遠望したであろうと思われる風光明媚な高台である。

しろがねに芒は靡きたたはる山はとびつきの晴れ着を纏ふ

35回目となる今回の式典参加者は、高千穂町当局者、地元の方々、

地元小・中学生、九州5支部の山仲間を含む約150名。式典は田原小学校児童による点鐘で始まった。続いて山岳遭難者への黙祷、献花、関係各位の挨拶に続き、児童の作文朗読。そして、この「ウェストン祭」を立ち上げた元支部長、故大谷優氏の「ウェストン師に捧ぐ」の詩を支部会員が朗読した。

詩の一節「…山を愛し山を尊ぶ老若男女が相集い あなたを思いあなたの前に追悼の鐘を鳴らし感謝の花を捧げる 日本の自然と山の美しさを自分の足で確かめながら その深淵さと素晴らしさを世に紹介したあなたは正に日本近代登山の父であり人道主義の先駆者 今あなたの人徳をしのびあなたを道しるべとして 自然と共に生きていく新たな決意と実践を誓いたい 風光明媚な『九州の軽井沢』はここ五ヶ所高原 晩秋の風は祖母山から 今 山里に降りていく…」を聞きながらこの思いを共有し、最後に「ウェストンの歌」を全員で合唱し、式典を終了した。



地元小学生による点鐘で式典を開始

刈り干しのすみで紅葉の三秀
台秋空高く点鐘ひびく

式典の後は、地区野菜集出荷場広場での前夜祭。地区の婦人会お手製の様々な料理がずらりと並び、炭火で温められたカップ酒が待っていた。このカップ酒が目当てで来る岳人もいるとか。ステージでの神事の後には恒例の夜神楽や踊り、太鼓の饗宴に会場は拍手喝采。広場では巨大なキャンプ・ファイヤーの炎が五ヶ所の夜空を焦がした。この炎が永く次世代に引き継がれ、燃え続けることを願いたい。

その後、宿泊場所の地区公民館に場所を変え、九州5支部48名での懇親会に入る。1年ぶりの再会



参加者全員により「ウェストンの歌」を合唱

を喜び合い、飲むほどに会話は弾み、宴は大いに盛り上がりつつあった。我が支部の来年度の全国支部懇談会への大きなエールももらい、感激もひとしお。

翌日は早朝から、それぞれの支部に分かれて計画した山に出発した。宮崎支部はやはり恒例の祖母山。6合目あたりまで紅葉の真っ盛り。近寄れば身も染まりそうな緋紅葉・黄葉の山路をたどりながら、ここに来てこそ味わえる秋の山の醍醐味に、仲間と山に登れる幸せを感じる山行であった。来年末、たくさんの山仲間と会えることを楽しみにしている。

（宮崎支部・総務委員長）

REPORT

講演会「登山を健康増進に生かす」を開催

医療委員会 村上和子

医療委員会では10月17日、東京四谷・プラザエフにて、齋藤繁氏（群馬大学）の講演会「登山を健康増進に生かす」コッスを伝授する『健康登山塾』を開催して」を開催した。

「健康登山塾」とは、群馬支部が行なっている登山教室で、登山を健康維持に結び付けること、中高年の山岳事故を防止することを目的としたものである。塾長は齋藤繁氏で、募集人数は定員を上回って



テストなど実地体験を交えた講演内容が好評だった

抽選になってしまいうほど人気があるとのこと。医療委員会では、登山を健康に生かすというテーマで、『登山塾』の紹介を含めて講演会を企画した。

講演は多方面からの切り口で、登山が引き起こす生理現象の物理的説明から始まり、その対処や安全のための心掛けなどを理論的に講義された。中高年の遭難の特徴は転倒などによる骨格筋系の障害、既往症の悪化、認知症などの原因による道迷い、技術的問題の転倒・滑落、自然環境によるものが挙げられる。

その回避のためにできるものとして、簡単に片足立ちのバランス・テストが紹介され、参加者が椅子から立って、開眼時と閉眼時のバランスの違いも実感した。山の事故が薄暗くなるころに多い理由は、視力低下によるバランス感覚の低下が原因の一つであることも領けた。「アレンのテスト」は手首を押さえて血液の流れの良し悪しを知る簡単な検査法で、

これも実地体験した。呼吸法は「肺をうまく使えば登りが楽になる」とのこと、口すばめ呼吸が推奨された。その医学的背景や口呼吸・鼻呼吸の違い、忍者の呼吸法、無呼吸・二重息吹・水遁の術（水中での竹筒呼吸）などまで広く紹介された。

「登山塾」は健康増進と登山力のパワーアップを志向する方を対象とし、1年目は赤城山、2年目は榛名山で、各6回登山を実施したという。登山前後と登山中に数回、心拍数や血圧、着地圧などを測定し、健康上の注意事項を意識しながら歩いてもらったという。その結果、血圧変動が小さくなり、着地が丁寧になる参加者が多かったという。動機付けやアドバイスもあり、運動習慣の確立や生活改善が図られ、健康増進につながったと思われる、とのことだった。

なお、「登山塾」1年目の詳細は会報「山」884号（2019年1月号）で報告されており、2年目は来年1月に発行される896号で掲載される予定。

最後は「坂道の上下りを健康増進に生かしましょう、登山は生活習慣病を予防できる健康法その

ものだが、コツと注意が大切」という言葉で締めくくられた。齋藤氏の活舌の良い軽妙な語り口に、時間のたつのを忘れるほどだった。

参加者は51名（女性21名、男性30名）で、アンケートは40名から回収された。回答者（女性16名、男性24名）の平均年齢65・3歳（21～84歳）で、JAC会員と会員外は20名ずつだった。講演会を知ったメディアは、「以前の参加者に送ったメール」（10名）が最も多く、以下「東京多摩支部ML」（8名）、「JAC会報」（7名）、「JACのHP」（5名）、「山と溪谷のウェブニュース」（5名）、「口コミ」（4名）、野口委員長 SNS（3名）などだった。評価は、「とても良かった」が33名、「良かった」が7名と好評だった。感想は「科学的、分かりやすく楽しかった」などで、興味深かったテーマは「呼吸法（口すばめ呼吸）、筋肉痛」などで、片足立ち、アレンのテストなどの体験学習や、「登山塾」へ興味を示す者も多かった。今後の医療委員会に希望するテーマは「生活習慣病、高山病」などで、さらなる情報発信への期待などもあった。結果を今後の企画に生かしたい。

NEWS

山梨県で指定山域の冬山登山届を義務化

—富士山、南アルプス、八ヶ岳などが対象

山梨県では、県内の主要山岳の厳冬期(12月1日～翌年3月31日)における登山届について、提出を義務化する。

同県では、近年の山岳遭難事故の発生状況に鑑み、登山者の安全を確保する対策を検討するために「山梨県安全登山対策検討委員会」(今井久委員長・山梨学院大学現代ビジネス学部)を設置した。山岳関係者をはじめ各界専門家による都合4回の委員会が開催され、同委員会は平成29年7月18日に報告書を知事に提出した。

報告書の中には「他県の先行例では、条例化しても遭難件数が減少していないものの、登山者の意識の高まりにより、登山計画書の提出件数の増加効果はあり、セルフチェックによって1人でも遭難者の数の減少につながる効果が期待できることから、条例による登山計画書の義務化をすべきである」と記されている。

それを受けて10月に「山梨県登山の安全の確保に関する条例」が

制定・公布された。この条例の中では「登山に係る届出の手続」として(1)安全登山推進区域(条例の公布から1年以内に施行)と、(2)安全登山推進重点区域(条例の公布から2年以内に施行)が挙げられている。(1)は年間を通じて登山届を提出することが努力義務とされているが、(2)では(1)の指定区域への特定の期間における立ち入りに際して、登山届の提出を義務化している。

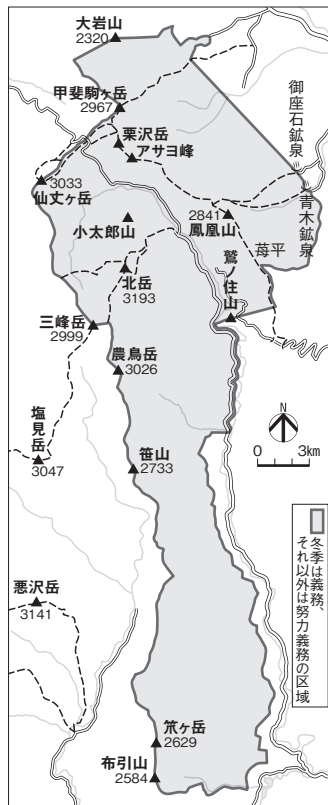
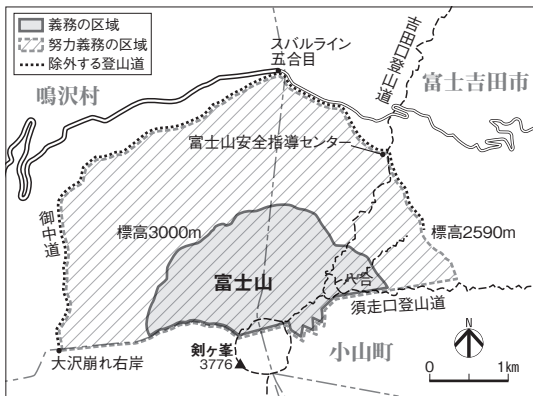
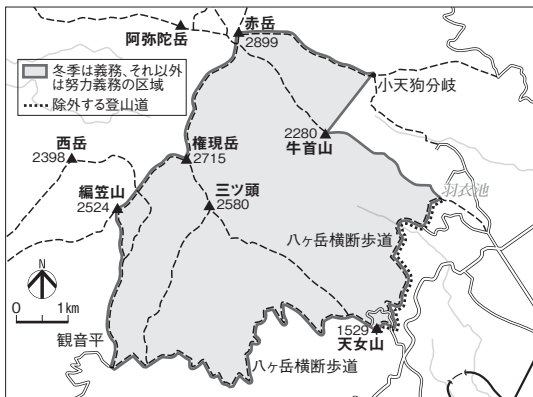
なお、報告書の「事前に入念な登山計画の策定が特に必要なのは、危険度や難易度が高い山系への登山であることから、遭難事故分析と山のグレーディング(難易度)D以上を中心にして次のとおり対象山岳を特定した」との答申により、以下の山が指定山域に挙げられている。

【南アルプス】北岳、小太郎山、間ノ岳、農鳥岳、鋸岳、甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳、鳳凰山、アサヨ峰、栗沢山、笹ヶ岳【八ヶ岳】赤岳、権現岳【富士山】3000m以上

(おおむね八合目以上)

以上のような経緯を経て、2年後の本年12月から「安全登山推進重点区域」への特定期間の入山は登山届提出が義務化されたわけだが、現時点で罰則規定はない。詳しくは山梨県観光部観光資源課

(課 ☎0555-223-11576)のHPで「山梨の登山・山岳情報のポータル」を参照のこと。登山計画書様式(厳冬期以外用、厳冬期用)や届出先一覧も掲載。
〔図版は「山と溪谷」2019年12月号より転載(制作〓千秋社)〕



TRAVELOGUE

「日本国」登山と藤島玄蔵書を訪ねて

千葉支部 節田重節

皆さん、「日本国」という山があるのをご存じだろうか。新潟県北部の下越地方、山形との県境にある555mの山で、別名「石鉢山」ともいう。不思議な山名のこの山の存在を知ったのは、多分30年以上も前のことだろう。ずっと気にはなっていたが、正直言って、いくらユニークな山名の山でも、500m余の低山を目的にわざわざ出掛ける気にはなれないでいた。

ところが昨年暮れ、越後支部の年次晩餐会に出席しており、その



二等三角点が設けられている「日本国」山頂

克明な登山ノートに圧倒される

今秋の10月30日、新潟駅頭に降り立つと、遠藤会員と高辻謙輔会員が迎えに来てくれた。まずは北を目指す。かねて話に聞いていた「藤島玄蔵書」を見学するためだ。

藤島玄会員（1905～1998）は、1946（昭和21）年に日本山岳会越後支部を創設、初代支部長に就任した名物支部長で、その膨大な蔵書が2015年、岩船郡関川村小見の旧川北小学校「川北ふれあい自然の家」に収蔵されたのである。

前村長の平田大六会員が出迎えてくれた。まずはびっしりと書き込まれた「藤島玄登山ノート」に圧倒される。さらに、山岳関係はもとより各地の地誌や民俗、寺社に関する蔵書が所狭しと並べられている。これらを収集し、自分の山

行記録と照らし合わせて執筆した成果が、詳細なガイドブックや「飯豊連峰集成図」などに反映されているのである。私が高校生のころ、初めて山の本を読み始めたとき買った『越後の山旅』（1960（昭和35）年、富士波出版）などもあり、懐かしさも一入だった。

この夜は村上市高根在住の遠山實会員手造りの「悠遊山荘」に宿泊、熊汁などを振る舞われる。

「日本国」制覇の実績だけは残る

羽越本線府屋駅付近で日本海の海岸線と離れ、小俣川に沿って東進し、「日本国ふれあいパーク」に駐車する。目の前に、立派なゲートが設けられた小俣コースの登山口があった。山形県側は鼠ヶ関駅からの小名部コースが開かれている。

杉の植林帯をジグザグに登り、やがて広葉樹の中を尾根沿いに高度を上げる。松ヶ峰を経て1時間強で蛇逃峠、その先が鷹待場で、少し下ってひと登りすると「日本国」山頂はあっさり制覇することになった。山頂には二等三角点と休憩舎があり、展望台も設けられているが、あいにく中国大陸からの黄砂飛来予報が出ており、鳥海

山はもとより、粟島もかすかにしか遠望できない。もちろん我がふるさと佐渡島は影も形もない。

ところで、「日本国」という不思議な山名は、どこからきているのだろうか。阿倍比羅夫の大同朝廷軍が東征のおり、ここを日本国と蝦夷地の境としたという説、崇峻天皇の第三皇子として伝わる蜂子皇子が都落ちして、この山に隠れ住んだという説、江戸時代、山頂の近くで見事な鷹が生け捕られ、將軍に献上したところ「捕れた山は以後、日本国と名付けよ」と仰せられたとか諸説あるが、いずれも伝承の域を出ない。

下山は蛇逃峠まで戻り、椿群生地や蔵王堂を経て小俣宿に降り立つ。出羽街道の面影を残すごごんまりとした集落で、家々に屋号が記されている。出羽三山への参詣者など多くの人々が行き交った宿場町だが、明治維新の戊辰戦争の戦場となり、集落のほとんどが焼き払われてしまったという。

名前の割にはあっけなく登れてしまった平凡な山だったが、積年の宿願を果たすことができたことが、何よりの収穫だった。

（越後支部会友）

N 東北 西南 S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

随筆「岳沢小屋にて」

西山秀夫

8月11日の「山の日」は穂高連峰に向かった。高齢の範疇に入ってから危険領域の西穂以北の縦走に慎重に挑んだ。西穂を越えると縦走路は途端に悪くなる。間ノ岳、天狗ノ頭と悪場、垂直の鎖場の登攀と下降の繰り返しだった。天気が良過ぎて水が不足、何よりも体力不足を痛感した。天狗のコルで打ち切って岳沢小屋へ下った。

下降した天狗沢も今は登山道としては認められていない。急斜面に堆積する小岩の沢であり、岩雪崩を心配しながら白いマーキングを探しつつ下った。沢を出てからはシモツケソウやアザミ、キンバイ、フウロソウなどのお花畑が広がる草原になった。岳沢小屋は優

しく迎えてくれた。

岳沢小屋は明神、前穂、奥穂、ジヤンダルムから西穂に連なる山懷に抱かれるように立つ。上高地を俯瞰し、遠くには乗鞍岳が素敵な姿で雲海に浮かぶ。圧倒的に大きく見えるのは近くの霞沢岳だった。

1902(明治35)年に小島烏水が29歳のとき、沢渡から草鞋わらじを履いて霞沢を遡り、苦勞の末に霞沢岳に登頂。その仔細は小島烏水著、近藤信行編『日本アルプス』（岩波文庫）の「鎗ヶ岳探検記のその七 霞沢の急湍を渉る記」にある。同行者は岡野金次郎だった。そして、鎗ヶ岳に登頂する。同年、岡野は勤務先のスタンダード石油でW・ウエストン『日本アルプスの登山と探検』の原書の鎗ヶ岳の写真を見て驚く。ウエストンらは徳本峠を越えて上高地入りして、鎗ヶ岳に登った。自分らの情報不足に愕然

としたのだろう。1905(明治38)年に岡野、小島、ウエストンの交友が始まり、日本山岳会設立へとまとまってゆく。霞沢岳は近代登山の黎明期の逸話を象徴する山なのだ。

12日は老鶯ろうおうの声で目を覚ました。天狗のコルは私にとってのジヤベルの『一登山家の思い出』（訳：尾崎喜八）のコル・デ・パレツス（怠け者の峠）だった。今日もう登ることはない。だからゆつくり起きて、朝食後は小屋が淹れてくれたコーヒーも飲んだ。正しく怠け者である。

標高2200m弱の冷涼な岳沢小屋から下りたくはなかった。登山道を下る道々で未踏のジヤンダルムを仰いだ。今回は敗退したジヤンダルム越え。ジヤベルは書いた。「ああ！ 称うべきはコルでのエネルギーである」と。鍛え直して再度挑戦しよう。

上高地の河童橋が近付くと右手に瀟洒な建物が見えた。上高地山岳研究所である。遊歩道から分かれ山研を訪問。先客に見覚えのある顔は岐阜支部のS氏らだった。K氏とは笈ヶ岳に登ったことがあった。しばし歓談させていただいた。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

「見える所は歩ける」 南アルプス縦走をして

北アルプスは縦走をしているが、南アルプスはいつも「単体」「単独」の山登りしかしたことがなかった。北岳。仙丈ヶ岳。甲斐駒ヶ岳。鳳凰三山。

今回しか？ チャンスがないような気がして、山と高原地図の塩見・赤石・聖岳の5万分の1地形図のほぼ全域を南から北まで歩く、「聖平から三伏峠」という山行委員会の縦走に参加した。

9月8日に飯田線の平岡駅とながっている宿に集合。北アルプスの山行などで一緒に顔見知りの方々がメンバーだった。

翌日は4時にタクシーが迎えに来てくれるというので、早々と就寝。昨夏も同じコースの山行が企画されたのだが、台風で林道が崩

落して通れなくなり、中止に。今年は巻き道ができて先に進めるということ。歩き出してしばらくしてヒルの洗礼を受けた。靴に書いて這い上がってくる。休憩という時には木から落ちてくる。もうびつくりの山道。途中、西沢渡をゴンドラで渡ったら、少なくなつたように見えた。この第1日は距離も長く、登りも多い。関東地方では台風が直撃した日で蒸し暑く、汗が半端なく出る。私はこの春に購入し、もう何回も履いている靴なのに痛い！ 靴擦れができた。時間が長いからか？ 途中で絆創膏を貼り、頑張つて聖平小屋に到着。登山客は少ない。

2日目、まずは聖岳に向かう。聖岳山頂から見えた百間洞山ノ家まで。早く着かないとこの小屋の評判のトンカツが食べられない。気持ちは焦るがなかなか着かない。下りが長い。なんとかカツに間に合う時間に着いて、夕飯は皆でトンカツ。小屋からの見晴らしもすばらしいし、揚げ立てカツがおいしい（時間を過ぎるとカレーだったよう）。

3日目は距離も短く、連泊をする荒川小屋まで。朝は普通に起きて、小屋で朝ご飯を食べて、赤石岳を目指す。今日は小雨。展望が利かない。赤石岳山頂にある避難小屋を見付けたときはうれしくて進行方向ではないのに進んでいつてしまった。案内書には荒川三山の展望が楽しめるとあったのに、小雨で全く見えない。標識とGPSを頼りに早い時間に荒川小屋に到着。小屋の人がストーブを点けてくれ、濡れた衣類を乾かす。翌日は荒川岳・悪沢岳に行くだけなのでゆつくりする。

4日目はリュックも軽く、体も慣れてか軽い（靴擦れは痛かったのでロキソニンを服用する）。天気も回復して、荒川東岳（悪沢岳）に向かう。途中、朝日の中の富士山がきれいに見える。雲海の上にあるで置物のような富士山。荒川小屋の赤い屋根も緑の中にかわいらしく見える。途中、保護されたお花畑があり、マツムシソウやイワ

インチンなどたくさんの花々がかわい。赤石岳方面のまるでスイスのような（写真で見た景色！ 素敵な山の斜面が昨日雨の中を歩いた場所だと知って、ちよつとがっかり。やはり天気が一番。この日も行程は軽く、小屋に12時過ぎに到着。ゆつくりお昼を食べて、それぞれに時間を過ごす。

5日目は私が地図を見ながら、こんなにも歩けるのか？ と躊躇したその日。荒川小屋からいくつもの峰々を越えて、その先に小さく見える避難小屋を通過、さらにその先の見えない三伏峠小屋まで。前日にリーダーの菊池さんから中岳山頂付近で説明を受けたときの北海道の銭亀さんのひと言が「見える所は歩ける」だった。名言と思い、これを表題にお借りした。

朝食を弁当にしてもらい、4時には小屋を出る。今日の歩行時間の予想は12時間。暗い中を昨日も通った道を登っていく。中岳に着いたころに日が昇る。私はもうお腹が空いておにぎりを食べる。前岳を過ぎると西側の展望が良いと地図には書いてあるが、すぐくガレている。こんな所でつまずいたりしたら大変、と緊張する。東側

は緑のある普通の景色なのに、西側は違う天体・惑星のようで草一つない。下り切って、また登る。

高山裏避難小屋を過ぎて、登りが続く。昨日遠くから見ていたときにはさほど大変ではないと、高をくくっていたのだが、登ったり下ったりがかなりある。やっと昨日から見えていた小河内岳避難小屋の上の山頂に着く。ここからまただらかに見えていたが登り下りが続き、やっと烏帽子岳に。目の前に塩見岳の険しい姿が、そして、右に緩やかな蝙蝠岳がきれいに望める。ここからは下りだけで三伏小屋かと私だけでなく思った人がいて、もう登りは嫌だ！ という声を耳にする。やっとの思いで、4時に小屋に到着。山道だけなのに約16km、2万7000歩。疲れた。でも、ロキソニンのせいなのか？ 筋肉痛が感じられない。

6日目、林道の出口・鳥倉登山口の先のゲートにタクシーを予約しているので少し早めに出る。峠からの下りは3連休の初日で快晴ということもあって、人が次々に登ってくる。この1週間人にあまり会わなかったの、ちよつと戸惑うほどの人だった。予定どおり

ゲートに着き、握手をして完歩できたことを喜ぶ。

長かった。でも歩けたんだあ、と感慨深い。菊池さん、山行委員の方々、そして同行の仲間たち4人に感謝である。
(東 洋子)

「空木岳から木曾駒ヶ岳まで縦走」に参加して

9月20～22日の空木岳・木曾駒ヶ岳縦走は、久しぶりの体力的な厳しさと、また緊張感を伴う山行であった。もちろんJAC本部の山行に参加するのは初めてのことで、広島支部や会社時代の同僚と行った、顔見知りの人とししか山登りをしたことがない小生にとつては新鮮な経験だった。

初日、駒ヶ池バス停近くの空木岳登山口から登り始め、すぐに我々広島組はゆつくりでリーダーについていくのはかなり厳しそうと感じた。それでも好天に恵まれ、マセナギから大地獄・小地獄を越えて眼前に駒石を望む所からは南アルプスや八ヶ岳、そして、富士山も見渡すことができ感激した。1日で標高差約2000mを登ったのは初めてで、その点では自信

になった。

翌日、木曾殿山荘から東川岳・熊沢岳・檜尾岳・宝剣山荘の縦走は本当にしんどかった。終日雨の中、厳しい岩場を上がったり下りたり気の抜けない箇所も多く、風も強まって休憩で止まると寒さを感じ、数年前、韓国の方が低体温症で亡くなったことを思い出した。

3日目、再び好天に恵まれ木曾駒から御嶽山を眼前に見て、将某頭山を経て桂小場へ下りたときは、ようやく終わったと感じたのが本音である。

今回、リーダーはもちろん親切なメンバーと同行させてもらいなんとか歩き通せたのは感謝、感謝です。ありがとうございました。

(広島支部・前田正司)

アルパインフォトクラブー 第27回写真展『心に映る山々』

2019年度の写真展は10月31日から11月6日まで、四谷のポートレイトギャラリーで開催された。今回の出展数は昨年同様40点。うち海外の山が8点。ここ数年はデジタル作品が主流になってきたも

の、まだ3分の1近くがフィルム作品だった。今回の入場者数は約500名で、多くの方々にお運びいただいた。

今年の写真展では、厳しくも美しい雪山の写真の展示が目立った。来場者が足を止め、「こんな所に小さく人が写っている。こんな所を歩くのですね」「いつか行きたい」と思っている山です」など、いくつかの美しい風景の一部となる日を楽しみながら眺めておられた。「この足跡はなんですか」「これはカモシカの足跡です」など、撮影者から写真の話や山の話を聞きながら鑑賞していただいたり、毎年足を運んでくださる知人や家族と、山の思い出を共有しつつ親睦を深める様子も見られた。

毎年、年明けするとすぐに次の展示会のための準備が始まる。会場予約や審査のためのプレゼン写真の募集と選定から始まり、各自作品撮影、提出、選定、ラボに発注、展示準備と数ヶ月かけて行なう。各人の心の山を作品として仕上げて、大きくプリントして展示すること、一つの山を踏破したようなやり遂げた気持ちになるとともに、多くの方に見ていただく

という緊張と喜びを感じる。

最近ではカメラを携えている登山者も多くなったように思う。スマートフォンなどから始まって写真に残す楽しさに興味を持たれた方も増えていることと思う。そうした自分の心に残った美しい山の景色を、さらに一歩進んでしっかりと仕上げて、作品とすることをもに楽しみませんか。毎月第2火曜日には本部ルームで月例会を行っている。定期的に写真を持ち寄ってアドバイスを受けたり、山や高山植物の情報交換をしたり、スキー撮影会などの企画もある。当クラブでは常時、新規会員を募集している。カメラ初心者の方も歓迎しているので、気軽に問合せしてほしい。

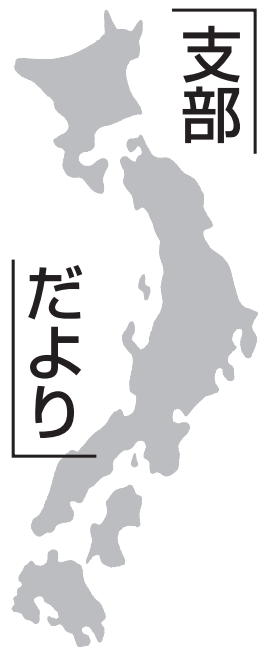
今年度も発表作品は全国各地を巡回し展示する。年次晩餐会、鳥取の伯耆国山岳美術館（4月5月）、酒田市総合文化センター（6月）、長野市柏与フォトサロン大門（9月）高尾599ミュージアム（10月）などで展示予定。詳細は後日掲載するが、最寄りの地域の展示へ、山を愛する方々とともに足をお運びいただければ嬉しく思う。

（溝部久美子）

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
日本山岳文化学会（編）	社会人山岳会会報：ケルンと岳人たち（山岳文化叢書 No.4）	146p/21cm	日本山岳文化学会	2007	発行者寄贈
東京農大芸術調査隊（編）	MANASLU：東京農業大学マナスル環境学術登山隊2016	296p/26cm	東京農大芸術調査隊	2019	発行者寄贈
星野秀樹	上越・信越 国境山脈	224p/20cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
石丸哲也	東京発 半日ゆるゆる登山（ヤマケイ新書 No.YS042）	318p/17cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
北杜夫	どくとのマンボウ 青春の山（ヤマケイ文庫）	277p/15cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
山岳写真ASA・長沢洋	奥多摩・奥秩父（ヤマケイアルペンガイド）	216p/21cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
渡辺幸雄	北アルプス 槍・穂高連峰（ヤマケイアルペンガイド）	176p/21cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
中西俊明 他	北アルプス 白馬・後立山連峰（ヤマケイアルペンガイド）	160p/21cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
星野秀樹	北アルプス 剣・立山連峰（ヤマケイアルペンガイド）	176p/21cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
B.マクナルド、恩田真砂美（訳）	アート・オブ・フリーダム：クルティカの登攀と人生	352p/20cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
谷山宏典	ドキュメント 豪雨災害：西日本豪雨の被災地を訪ねて	231p/19cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
佐久間大輔	きのこの教科書：観察と種同定の入門	240p/21cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
久保一樹（編）	TRAIL RUN 2019 Summer（Mountain Sports Magazine）	240p/21cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
Purandare, Nandini（ed.）	The Himalayan Journal 2019（Vol.74）	391p/22cm	The Himalayan Club	2019	発行者寄贈
MacDonald, Dougal（ed.）	The American Alpine Journal 2019（Vol.61 Iss.93）	368p/23cm	AAC Press	2019	発行者寄贈
Douglas, ED（ed.）	The Alpine Journal 2019（Vol.123）	441p/23cm	The Alpine Club	2019	発行者寄贈
Kohler, Anette（ed.）	BERG 2020（Band 144）Alpenvereinsjahrbuch	256p/27cm	D.A., O.A. & A.S.T.	2019	発行者寄贈
Maeder, Herbert	Gipfel und Grate：Das Erlebnis der Schweizer Berge	228p/32cm	Walter-Verlag	1980	関塚貞亨氏寄贈

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

北九州支部

地形研究山行

由布岳フラタモリの登山

昨年の秋に、筆者が作成した久住山のジオットリストマップを手に持って、火口や溶岩ドームなどの火山地形を観察しながら登るという、フラタモリの登山が好評だったので、その第2弾として由布岳に登ることにした。

6月8日(土)、9時過ぎに参加者は由布岳正面登山口に集合した。朝方までの雨は上がったものの、山頂は雲の中だった。由布岳は四方に側火山を持ち、北と南斜面は火砕流で覆われ、頂上付近には約2000年前の溶岩と噴火口を持つ特色のある火山であることなど、概略の説明をした後、9時30分より登山を開始した。

野々草火砕流堆積物上のやや緩やかな草地の斜面からミズナラ、

カエデなどからなる樹林の中を快調に登った(速過ぎるとの声あり)。合野越で休息後、登山再開。由布岳の主火山の溶岩で形成されたやや傾斜のある斜面ではジグザグ道になり、植生はやがて低木林に変化した。見晴らしの良い所で、端正な山体をした飯盛ヶ城の側火山とやや窪んでいる火口を確認した。また、正面登山口の南に、東西に連なる山稜(水口山)の北向き斜面が由布院断層(正断層)による断層崖であること、また、この断層の一部は慶長元(1596)年の別府湾を震源とする地震によって崩壊し、流山となって津江付近まで到達したことを説明した。

標高1200m付近の森林限界を越えると、花の時期をやや過ぎたミヤマキリシマが現われるようになった。由布岳の森林限界が低い位置にあるのは、乾燥しやすい火山地質、風当たりの強い独立峰

東京多摩支部設立10周年記念事業

インドヒマラヤ・ザンスカール未踏峰遠征隊

《参加者募集要項》

1 募集する記念事業内容

「海外6000m級未踏峰登頂を目指す遠征」

●遠征の目的

東京多摩支部は2020年に設立10周年を迎える。その記念事業の一環として日本と世界の登山界へ、登山のすばらしさとチャレンジ精神の重要性をアピールするため、近年、世界の登山界が標榜する「冒険的登山への回帰」を実践する。

2 遠征計画

●遠征実施時期 2020年7月18日(土)～8月10日(月)の24日間を予定

●募集人員 4～10名程度

●募集期間 2020年1月18日(土)～4月30日(木)

3 遠征参加者の条件

(1) 公益社団法人日本山岳会会員および準会員(日本出発時点) (2) 遠征中の健康を自己で管理ができ、海外の高峰・未踏峰に興味がある方 (3) 冒険志向を持ち、2週間程度の高所キャラバンに順化・協調できる方 (4) 東京多摩支部会員以外の参加も歓迎(国内にて事前山行を実施)

4 資金計画(個人負担予定額)

日本発着・概算見積もり金額で、総額350万円。1人35万円の予定(金額は変動する可能性がある。また、チップやキャラバン以外の食事代(宿泊ホテルにより差異)などは別途必要)。(インド・レーの現地エージェント(Hidden Himalaya)の見積もりを元に試算)

5 登頂候補の山(対象とする山域)

インドヒマラヤ ザンスカール・テマサ谷域(The Indian Himalaya Zaskar Temasa Nala)

①P6436 (T13) 6436m 104 Open Peaks

②P6028 (T12) 6028m 104 Open Peaks

③P5908 (T11) 5908m

④P6294 (T4) 6294m

* 目的の未踏峰は「IMFの登山許可」が下りて決定となります。

6 遠征隊参加申込み先・問合せ先

詳細な遠征計画(日程・宿泊・装備ほか)やキャラバン内容・登攀技術・必要体力・食事・資金計画など、どんなことでも結構ですので、お気軽に問合せください。

【遠征隊企画担当】 北島英明(15942)

メール: kitajima7m4tyv@gmail.com

携帯電話: 090-2644-4819

であること、また、約2000年前に活動を終えた新しい火山であることによるものだ。

由布岳山頂溶岩(安山岩)が溶岩ドームを形成している斜面に変わると、ジグザグ道は一段と急になり、皆の脚の動きが鈍った。11時30分、ようやく由布岳火口の縁に当たるマタエに到着した。山頂付近で暗れることを期待していたが、霧で被われていた。ここで昼食をとった後、霧の中を東峰(1580

m)を目指した。

山頂での眺望は利かず、由布岳の火口や周囲の山々を見ることができなかったのは残念だった。しかし霧の中で咲くミヤマキリシマのピンクの花が、冴えて美しく見えた。この日の宿は由布院盆地の中にある、九州高等学校の研修施設である由布院山荘。山荘の源泉掛け流しの温泉に入り、足腰の疲れを取った。

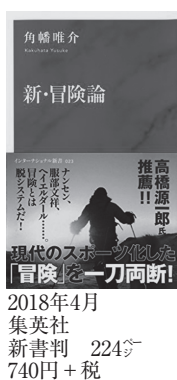
(横山秀司)



図書紹介

角幡唯介著

新・冒険論



私の車にはカーナビが付いていない。車を買うときに標準装備の

ように付いていた物を取り外してもらって、その跡にラジオとCDプレイヤーを付けてもらったのだ。ディーラーが「この人、おかしいんじゃない」というような目で私を見ていたのが今でも思い出される。別に奇をてらったわけではない。ただ、そんなものがあるとドライブの一番の楽しみ(と私が勝手に思っている)、自分でのナビゲーシ

ョンができなくなってしまうからである。

本書を読んでいて、著者も同じようなことをしていることを知り、うれしくなってしまった。私は別に脱システムを考えていたわけではないが、日本を代表する探検家も同じように世間一般からいうと「変わっている」ことをしていたのだ。ただ私の場合は、冒険を考えたこともなく、単にカーナビなどという訳の分からない機械のために、自分でルートを考えたり決定したりする自由を奪われたくないというだけだが……。

著者、角幡唯介氏は日本を代表する冒険家である。本書ではそんな著者が北極圏などで冒険を行なってきた経験をもとに、冒険の本質とその社会的役割を語っている。

本書のキーワードは「冒険Ⅱ脱システム」である。今、社会は高度にシステム化され、人々に便利さをもたらししている。システム化された世界に身をゆだねるのはとても楽で、心地良い。山でいえば、スマホやGPSがあれば、何も考えなくてもそれが山に連れていってくれる世界である。そのため「ネットで検索して記録が出てくるコー

スにだけ人が集まり、外れる可能性があるルートにはほとんどだれも行かなくなった」。

冒険はそんなシステムから脱して、「他の成果では決して得ることのできないほど鮮烈な自由」を得る行為である。ただ、「冒険の自由で得られる感覚は決して世間でいうところの楽しいとか快適だとか幸せだとかという感覚と一致しない」。

確かにカーナビやGPSを使わないということは、頭を使うし、それによって安全や快適性をずいぶんと阻害する行為である。ただ、そ

の先には、著者の冒険とは比べものにならないくらい卑小だが、確かに自由がある。

(近藤雅幸)

阿部幹雄著

那須雪崩事故の真相 ——銀嶺の破断——



2019年6月 月刊
山と溪谷社 304頁
四六判 1600+税

著者の阿部幹雄氏は、1981年、ミニヤ・コンガでの8人が滑落した遭難で生き残り、長年の遺体搜索収容を行なった経験を持つ。フィールド・アシスタントとして南極観測隊の安全管理に携わり、雪崩の科学的な知識や救助に関する活動を行なう雪崩事故防止研究会代表、雪氷災害調査チーム前代表を務めている。

2017年3月27日、栃木県高等学校体育連盟主催の春山安全登山講習会でその雪崩事故は発生した。那須連峰・茶臼岳の真つ白な斜面でラッセル訓練中の高校登山部の生徒7人、引率教員1名が表

層雪崩に巻き込まれ死亡、多数の生徒らが流されるという大惨事となった。

阿部幹雄氏は、事故発生後に雪崩現場の調査に入り、研究者とともに発生の経緯からその原因に至るまで丹念に検証している。真実を知るためである。積雪断面観測をはじめとした現地調査、ドローンも利用した画像解析、気象データのなどの研究成果に加え、関係者の証言、そして何よりも生き残った高校生からの誠実な話が、著者の結論へ向かう道筋を付けた。

本書の各章の見出しから真相に迫る様々な角度からの取り組みが読み取れる。第一章 十四人の隊列、第二章 消えた痕跡、第三章 真実を知りたい、第四章 隠された雪崩事故、第五章 弱層は板状結晶、第六章 雪崩発生、第七章 救えなかった命、第八章 生存生徒の証言、第九章 銀嶺の破断、第十章 親の願い、少年の夢、と続く。

栃木県教育委員会が設置した那須雪崩事故検証委員会は、遭難から7ヶ月後に、雪崩は自然発生と人為発生という両方の可能性を否定できない、と結論した。しかし、著者は2年にわたり綿密な取材を

続け、雪崩は人為発生という結論にたどり着いたという。

雪山を目指す登山者は、雪崩事故がどのようなものであるか、何を



令和元年度第7回(11月度)理事会 議事録

日時 令和元年11月13日(水) 19時

00分～20時30分

場所 集会室

【出席者】古野会長、野澤・山本・

坂井各副会長、永田・萩原・

古川各常務理事、安井・清

登・神尾・清水・飯田・近

藤・波多野各理事、石川監

事

【欠席者】柏理事、黒川監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【協議事項】

1・支部連絡会議の議題について協議をした。(永田)

2・山岳での自然災害について、

もたらすのか、再発を防ぐためにやるべきことは、本書を読んでもから踏み出してほしいと思う。

(川瀬恵二)

支部に情報提供を依頼することにした。(永田)

【報告事項】

1・正会員16名、準会員5名の入会承認の報告があった。(古野)

2・12月21日に第2回評議員会を開催する旨の報告があった。(古野)

3・山研運営委員会の業務報告および山研の改善計画について中間報告があった。(安井)

4・秩父宮記念山岳賞の決定について、全理事持ち回りで、賛成15名、反対なしで承認を得た旨の報告があった。(山本)

5・登山計画書の提出状況について報告があった。(山本)

寄附金および助成金などの受入報告 (令和元年11月30日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
中島 隆 会員	50	日本山岳会運営費用
小川 武 会員	100	東京多摩支部 ザンスカール 遠征支援

ルーム目誌

11月

6・海外登山助成金事業において、他団体と意見交換をしたとの報告があった。(坂井)

7・紺綬褒章の審査期間について報告があった。(永田)

8・年次晩餐会準備の進捗状況について報告があった。(永田)

9・「山」11月号について報告があった。(節田)

その他

1・寄附者への記念品のデザインなどが披露された。(永田)

5日	常務理事会 スケッチクラブ
6日	山行委員会 図書委員会
7日	YOUTH CLUB 山岳地理クラブ
8日	YOUTH CLUB
11日	総務委員会 スキークラブ
12日	山岳研究所運営委員会 財務委員会 フォトクラブ
13日	理事会 休山会 山想倶楽部
14日	九五会
15日	自然保護委員会 山の自然学研究会
16日	資料映像委員会
18日	総務委員会 資料映像委員会
19日	スキークラブ バックカントリークラブ
20日	会報編集委員会 フォトクラブ 三水会 つくも会
21日	マウンテンカルチャークラブ
25日	科学委員会 「山の目」事業委員会 みちのり山の会
26日	総務委員会 青年部 支部事業委員会 デジタルメディア委員会 遭難対策委員会 平日クラブ

27日	総務委員会 家族登山普及委員会 00会 麗山会
28日	総務委員会 公益法人運営委員会 学生部 二火会 山遊会
29日	総務委員会 記念事業委員会 YOUTH CLUB
30日	土曜会 11月来室者 518名
会員異動	
物故	
西田 進(12227)	19・11・8
大澤弘明(13024)	19・3・18
石村孝夫(14076)	19・7・2
退会	
大内賢治(9355)	福島
岸 清二(9689)	越後
山本武久(12413)	京都・滋賀
渡邊正宏(13867)	岩手
仲谷朋尚(15512)	東京多摩
海老原千代(A0102)	
土橋通予(A0212)	山陰



日本山岳会報 山 895号

2019年(令和元年)12月20日発行
 発行所 公益社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビューハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 日本山岳会会長 古野 淳
 編集人 節田重節
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社

◆編集後記◆
 ●本年の年次晩餐会は、天皇陛下がご臨席くださったこともあってか509人もの出席者があり、盛り上がりました。陛下も古野会長はじめ役員や、秩父宮記念山岳賞受賞者の安間茂樹会員ほか講演会登壇者らとメイン・テーブルを囲んで、時間も延長して大いに歓談され、お酒も嗜まれたようです。
 ●晩餐会は多くの会員の協力で開催されており、主管の総務委員会のほか自然保護委員会や図書委員会、同好会がすべて手弁当で動いてくれました。本会報巻頭の報告原稿も、フリーのライター、谷山宏典会員がノーギャラで、わずか2日間で書き上げてくれました。華やかな晩餐会の陰に、こんな裏方さんたちの活躍があることを知ってもらえれば幸いです。(節田重節)